慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「時間の社会学」と社会学的時間批判 : 第96回日本社会学会大会テーマセッション報告を中心に
Sub Title	The "sociology of time" and sociological criticism of time : focusing on a thematic session at the 96th annual meeting of the Japan Sociological Society
Author	梅村, 麦生(Umemura, Mugio)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2024
Jtitle	メディア・コミュニケーション : 慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media and communications research : annals of the Institute for Journalism, Media & Communication Studies). No.74 (2024. 3) ,p.9- 18
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : グローバライゼーションと持続可能なメディアのデザイン : 意識とモビリティーズ2
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20240300-0009

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「時間の社会学」と社会学的時間批判

――第96回日本社会学会大会テーマセッション報告を中心に――

梅村麦生

序：はじめに

グローバル化がますます進行し，持続可能性がいよいよ喫緊の課題として焦点化している現代社会のなかで，人びとの意識とモビリティーズとはいかに関わり合うのか。そうした問いをめぐって，現代社会におけるモビリティーズ概念の理論的有効性とそのアプローチのもつ多様性と可能性を，社会学の文脈における時間の概念に基づいて検討するという本特集の趣旨のもと，本稿は社会学における時間概念と時間研究に関する共同企画として，2023年10月に開催された第96回日本社会学会大会でおこなわれたテーマセッション「「時間の社会学」と社会学的時間批判」の紹介をおこなうものである。

社会と社会的なものにとって，そして社会と社会的なものを研究する社会学にとって，時間はどのような意義をもつか。そうした問いに取り組む研究として，「時間の社会学」と呼びうる諸研究が現れるようになって，すでに久しい。

しかし，鳥越（2022: 10）がまとめるように，かねてより「社会理論の文脈においても，時間の問題を考慮することの重要性は再三にわたって指摘」されてきており，時間を主題とする社会学の論考についても一定の蓄積があるものの，依然として「数多くの研究がそれぞれ独自になされる一方で，これらの研究をまとめる統一的な土台を欠いている」と言われる状況にある。

そこで以下では，現代社会学のなかで「時間の社会学」と呼ばれる諸研究がどのように現れきたのか，その背景をごく簡単に見ていく。それに続いて，今日の「時間の社会学」で何が問題とされているのかを，同じく簡潔に論じることとする[1]。それらを踏まえて，テーマセッションの概要を紹介する。

1：今日における「時間の社会学」研究の背景

時間に関する社会学的研究は，社会学という学問分野が制度的に確立されていくのと同じくらい早くからおこなわれてきた。社会学全体の古典となっている研究，つまりエミール・デュルケームと彼の学派によるカテゴリー論や宗教表象論，ゲオルク・ジンメルの貨幣論や大都市論，あるいはマックス・ヴェーバーの宗教倫理論や合理化論――さらに言えば，エンゲルスらの労働者階級研究や労働時間論――などは，「時間の社会学」の古典としても重要視される研究である。さらにピティリム・アレクサンドロヴィッチ・ソローキ

ンとロバート・キング・マートン（Sorokin and Merton 1937）やジョルジュ・ギュルヴィッチ（Gurvitch 1958=1964）による「社会的時間」を主題化した研究は，まさしくその後の研究に対する画期をなしている（参照，「社会の時間」研究会 2020: 76-77）。

しかしながら，今日のようなかたちでの「時間の社会学」研究への注目は，上述の鳥越（2015: 87-88, 2022: 10）も言及するヴェルナー・ベルクマン（Bergman 1983: 462=1992: 82）が早くから指摘しているように，「社会学において時間の問題は軽視され周辺化されてきた」という訴えが同時多発的に現れてきた時期，つまり早くて 1970 年代半ば，おおむね 1980 年前後に始まったと考えられる[2]。この時期に例えばノルベルト・エリアス，アンソニー・ギデンズ，ピエール・ブルデュー，ニクラス・ルーマンといった社会学者たちが，社会と社会的なものにおける時間や社会学における時間概念の意義を強調しながら，独自の社会理論を発展させている。

この 1970 年代半ば以降に生じた，社会学における時間的契機への注目ないし再注目は，1960 年代のいわゆる「社会学理論の危機」のなかで，それ以前に興隆を見せたタルコット・パーソンズの構造―機能主義や，彼以外にもさまざまな論者による機能主義の社会理論が「静態的・無時間的・反歴史的」な傾向をもつとして批判を集めたことへのアンチテーゼから，「時間を真剣に受け止める」アプローチがさまざま提起されたことに始まるとも言われる（Martins 1974: 246-247）。その後の関連する研究のなかでは，その流れは例えば「社会学の時間化」（Baert 1992: 4）や，「ポストモダニズムの時間論的転回」（Adam 1995: 149-175）とも評されている。その時期に現れてきた〈時間的なもの〉をめぐる社会学の構想は，現代社会論や後期近代化論などと呼応しつつ，単に社会学内部での時間概念や時間問題の軽視を指摘するにとどまらず，現代社会と現代社会学の双方における時間的契機の意義を強調するものであった。

したがって，現代社会学において時間を主題とする研究の多くは，社会と社会的なものはそもそも無時間的 = 永遠的 = 固定的なものでなく，あくまで時間的 = 一時的 = 流動的なものであり，そして現代社会ではその時間性 = 一時性 = 流動性がより際立つに至り，社会学もまたそうした時間性を何らかのかたちで組み込んだ社会理論を構築しなければならない，と主張している[3]。その背景には，小川（西秋）（2010: 4-8, 2022: 147-148）が指摘するような，グローバル化やモビリティー化のさらなる進行という現代社会あるいは後期近代社会に対する診断があり，そのなかでデヴィッド・ハーヴェイ（Harvey 1990: 284-307=2022: 449-492）による「時間－空間の圧縮」やギデンズ（Giddens 1990: 17-21=1993: 31-35）による「時間－空間の分離」の議論が現れている。

そして以上のような流れのなかで，とりわけ 1990 年前後以降になると，「時間の社会学」と呼びうる研究分野を，いわば自覚的に境界画定し確立していこうとする試みが重ねられている。その一例として，ジョン・ハサードによる『時間の社会学』リーディングス（Hassard 編 1990）は，既存の社会学研究のなかから，「時間の社会学」研究にとって先駆となりうる諸研究を取り上げている。また爾後のこの分野での研究に多大なる影響を与えたのは，現代社会とその理論における時間概念の意義を説いた先駆の一人であるギデンズやマイケル・ヤングなどの取り組みに触発された，バーバラ・アダムによる『時間と社会理論』（Adam 1990=1997）の刊行である[4]。

このような流れと並行して，この分野の学説史，つまり「時間の社会学」の歴史を再構成しようという試みも，さまざまなかたちでなされるに及んでいる。そうしたいわば「時間の社会学」史的研究のなかでは，「時間の社会学」に関わる既存の諸成果を整理し，古典の（再）評価や発掘，時期区分の設定，先行諸分野や隣接諸分野との（再）接続などを通して，「時間の社会学」と呼びうる研究分野の境界が遂行的に提示されている[5]。

2：今日の「時間の社会学」研究に共通する問題系

以上のような背景を踏まえて，今日の「時間の社会学」研究ではどのようなことが問題とされているのか。ここからは，「時間の社会学」研究に含みうる近年の諸研究のなかで，複数の研究によって共有されている問題系を，いくつか見ておきたい。

2-1：〈社会的なもの〉に対する〈時間的なもの〉の作用と相対的自律性

社会学的な時間研究，あるいは「時間の社会学」研究という場合，そこでまず想定されているのは，〈時間的なもの〉と〈社会的なもの〉との関わりである。

そう考えると，例えばソローキンとマートンの論考（Sorokin and Merton 1937）における言及を筆頭に，「時間の社会学」研究の最重要の古典とされてきたエミール・デュルケーム，アンリ・ユベール，マルセル・モース，モーリス・アルヴァックスらの研究（cf. Hirsch 2016）は，当時の民族学ないし人類学，あるいは民族誌や宗教学の知見を摂取したうえで，時間概念の機能と起源を集団的な活動のうちに見出し，こう言って良ければ〈時間的なもの〉に対する〈社会的なもの〉の意義を問う方向での研究に道を開いた。

それに対して，より近年の「時間の社会学」研究では，むしろ社会生活における〈時間的なもの〉の独特の意義，つまり〈社会的なもの〉に対する〈時間的なもの〉の作用や相対的な自律性とが，問題化されるに至っている[6]。マルク・エルハルデュス（Elchardus 1988: 36-37）の表現を借りれば，社会理論における「クロノスの再発見」，つまり社会的なものに対して「創造と破壊の可能性」をもつものとしての「時間」の主題化が生じている。あるいはエルミニオ・マルティンス（Martins 1974: 250）の分類にしたがえば，単に「時間」を「主題」とするのみならず，その「実質的」な影響を問題とする「実質的時間論（substantive temporalism）」が，さまざまなかたちで現れてきた。その典型例として，近代化および産業化以来の時計時間とカレンダーの浸透による社会生活の変化，労働時間の増加や減少，あるいは画一化と拡散――それぞれ，工場労働を中心とする工業化の時代とサービス労働が拡大するポスト工業化の時代の傾向とも重ねられる――といった変化にともなう社会生活の変化，「期限と期日」といった時間形式が組織活動や個人活動に与える影響，技術革新による時間の細分化と個人化による社会生活の変化などへの注目を挙げることができる[7]。

それとともに，それまで「時間の社会学」の古典として上述のデュルケームとデュルケーム学派の諸研究が主流に位置づけられていたとすると，例えばすでに紹介してきたルーマン（Luhmann 1976=1990），ゼルバベル（Zerubavel 1981=1984），ギデンズ（Giddens［1984］1987=1998），アダム（Adam 1990=1997）の研究に見られるように，ジンメルやヴェーバー，あるいはジョージ・ハーバート・ミードやアルフレッド・シュッツ，さらにはアーヴィング・ゴッフマンといった，それまで必ずしも「時間の社会学」の先駆者とは考えられてこなかった[8]，社会学のこの下位分野からすれば傍流に位置づけられてきた人物たちの研究が，時計時間や貨幣経済のリズム，時間規律や同時性ないし共在，あるいは人間学的な時間意識や行為の時間的次元が社会生活や社会関係に与える影響に着目した，いわば〈時間的なもの〉から〈社会的なもの〉への作用を論じた先駆として，あらためて注目されるに及んでいる。デュルケームとデュルケーム学派の研究が今日でいえば特に人類学と宗教学の知見に接続していたとすると，これらの古典的な研究は主に歴史学や歴史哲学，そして意識哲学や行為哲学の知見に接続している[9]。

そうした古典の再評価も含めて，〈時間的なもの〉と〈社会的なもの〉の関わりを適切に論じるための概念枠組みや理論を構築しようとする試みは，今日になお続いている。

2-2：社会的時間の多元性と統一性

もう一つの重要な論点は，社会的時間の多元性と統一性という問題系である。

この問題系はとりわけ，社会学の独自の研究対象としての「社会的時間」を析出し概念化したという点で，「時間の社会学」という分野の成立に大きく寄与した，前述のソローキンとマートン（Sorokin and Merton 1937）やジョルジュ・ギュルヴィッチ（Gurvitch 1958=1964）の論考が，いずれも「社会的時間」の多元性を議論の出発点に据えていることに始まっている。そこにはギュルヴィッチ（Gurvitch 1958: 12=1964: 24）が引くガストン・バシュラール（Bachelard［1936］1950: 90=1976: 123）が述べたように，物理学における相対性理論がもたらした「時間多元論（le pluralisme temporel）」のインパクトが人文社会諸科学にも及んだことの余波が見出される[10]。

したがって，これまでの「時間の社会学」研究のなかでは，社会集団や社会関係ごとに，あるいは社会的なものの水準ごとに異なる多様な「社会的時間」のあり方について論究されてきた一方で，すでにソローキンとマートン（Sorokin and Merton 1937: 628）が社会圏の拡大と都市化や社会分化の進行にともなう，いわば「時間エスペラント」としての「天文学的時間」の普及による統一化に言及していたように，今日の「時間の社会学」研究では，特に社会的時間の本来的な多元性と，それに対する時計時間や量的・抽象的な時間概念への収斂とのあいだでの葛藤や対立，あるいは併存について着目されている。

そうした異なる時間概念や時間意識の対立ないし併存を捉えようとするときに参照される枠組みには，対立により焦点を当てたものとして，例えば文化人類学者エドワード・ホール（Hall 1959=1966, 1983=1983）が提起した「モノクロニズム」対「ポリクロニズム」の枠組み，あるいは「産業時間」対「環境時間」（Adam 1998；Urry 2000=2014, 2016=2019），「時計時間」対「関係時間」（内山 1993），「時計時間の一様性」対「時間の多様性」（Geißer ほか編 2006），さらには「近代」における「時間化」対「後期近代」における「脱時間化」（Rosa 2005=2012；伊藤 2008）[11] といった二項図式がある。また，そうした異なる時間意識や時間概念の並存を記述しようと試みているものとして，上述のバシュラール（Bachelard［1936］1950=1976）による「持続と休息」や「時間の重ね合わせ（le superpositions temporelles）」，そして野家啓一の「垂直に積み重なる時間」（野家［1996］2005；cf. 浜 2010；鳥越 2016）といった現象学的・物語論的な概念，あるいは行為論に基づく「社会学的アンビバレンス」（cf. 濱西 2016）や，世代論や歴史的時間論に由来する「非同時的なものの同時性」（cf. 梅村 2020a）といった概念が参照されている。

2-3：時間概念の変化と社会変動との連関

以上の二つの問題系に加えて，「時間の社会学」研究の主要な論者たちが重要な論点として提起しているのが，人びとが抱く時間概念や時間意識の変化が，より大きな社会関係や社会構造の変化，つまり社会変動と何らかのかたちで連動している，という主張である。

そこで取り上げられる社会変動とは，世界史上における古代文明の成立や伝播に始まり，特に注目されているのは産業化や資本主義化をともなう前近代社会から近代社会への移行，そしてポスト工業化や情報化をともなう後期近代社会への移行の各過程である。

以上の問題系には，とりわけこの問題に関しても先駆けといえるソローキンやギュルヴィッチに始まり，ピエール・ブルデュー，エドワード・パルマー・トムスン，ウィルバート・エリス・ムーア，見田宗介，エビエタ・ゼルバベル，ノルベルト・エリアス，アンソニー・ギデンズ，マイケル・ヤング，ジョン・アーリ，ハルトムート・ローザといった，今日「時間の社会学」研究の重要な論者として取り上げられることの多い著者たちが，ほとんど軒並み取り組んでいる。

2-4：近代社会の社会的病理としての時間的病理

最後にもう一つ，ここで取り上げておきたい問題系として，近代社会や後期近代社会の〈社会的病理〉とはいわば〈時間的病理〉であるという，社会診断ないし時代診断を下す議論がある。

例えば，時計時間に拘束される「近代」の時間意識を「狂気」として，『時間の比較社会学』の前段で問題化した見田宗介（見田 1978= 真木 2013）のように，とりわけ時計時間と均一的なカレンダー，それらのもとにある量的な時間概念が，そうした時間概念と密接に関わりあう貨幣経済の全面的な浸透と並んで，旧来の人間関係や共同体，あるいは個人の存立を脅かすような，近代社会における社会的病理の中心的な要因として言及されている。

さらに後期近代に向かうにしたがって，時計時間のみならず，ジョン・アーリやハルトムート・ローザの言うように社会生活の「瞬間」化や「加速」が問題化されるようになっているが，そうした時計時間や産業時間による時間意識や時間概念の画一化に抗するものとして，上掲のように内山節は「関係時間」の構想を，アダムやアーリらは地球環境に現われる「時間景観」や「氷河の時間」といった超長期の時間展望を，さらにローザ（Rosa 2018）は「共鳴関係」の再構築を提起している。

以上の四つの問題系について，前半の二つはより一般的に〈社会的なもの〉と〈時間的なもの〉との関わりを，そして後半の二つは〈社会的なもの〉と〈時間的なもの〉との関わりのなかでもより特殊なあり方を問題化するものとして，多かれ少なかれ重なり合いながら，ここで見てきたようにそれぞれ「時間の社会学」に含みうる数多くの研究のなかで論じられている。

3：第 96 回日本社会学会大会テーマセッション「「時間の社会学」と社会学的時間批判」

本稿の筆者は以上のような研究動向に基づき，社会学における時間概念や時間理論そのものの探究をも射程に含めたより一般的な「時間の社会学」研究から，後半に挙げた近代社会における社会変動や時間的病理に関する論考をも対象として含みうるように，「「時間の社会学」と社会学的時間批判」と題して本テーマセッションをコーディネートした[12]。

本テーマセッションには 8 名の報告者がおり，各報告の報告者と報告題目は以下に記載するとおりである。本テーマセッションは午前と午後に始まる二つの部会に分かれて開催され，前半では主に「時間の社会学」の基礎概念や基礎理論を論じる報告がおこなわれ，後半では「時間の社会学」のより応用的な理論や概念の検討をおこなう報告がおこなわれた。

以下では部会ごとに，報告者および報告題目と，さらに各報告の内容についてもごく簡単に，順に紹介しておきたい[13]。

【セッション前半：2023 年 10 月 8 日（日）9:30 ～ 12:30】

(1) 鳥越信吾（十文字学園大学）「社会の時間についてのいくつかの認識論」
(2) 德宮俊貴（神戸大学）「コンサマトリー概念の再構成：現在主義的解釈をこえて」
(3) 小川（西秋）葉子（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所）「時間をめぐるプラグマティズムの系譜：ジェイムズ，パーク，ゴフマンを中心に」
(4) 末田隼大（慶應義塾大学大学院）「時計時間の知識社会学：バーバラ・アダムの複数的時間論を手がかりにして」

第一報告「社会の時間についてのいくつかの認識論」で鳥越は，社会学における近代的時間の研究が前提としてきた，ともすれば「現在主義」的な認識論を問い直すなかで，とりわけエトムント・フッサールから見田宗介らに共有されてきたとする「累積する時間」の構想がもつ「認識論的意義」を再検討し，なかでもリチャード・デニス・ジェラルド・アーヴァインの『ディープタイムの人類学』（Irvine 2020）から引き出した「社会的次元と物質的次元の関係性の再考」という論点をもとに，社会的次元で累積する時間という考え方の探索的意義を説いている。

第二報告「コンサマトリー概念の再構成：現在主義的解釈をこえて」で徳宮は，見田宗介が提起した「コンサマトリー概念」について，とりわけ「現在の充足」を示す「時間論的側面」，「個我の裂開」を示す「存在論的側面」，そして「効用の彼方」を示す「主体論的側面」という三つの側面に沿って再解釈することをとおして，現代の若者論などでこの概念が応用される際に見られる「現在主義的解釈」をこえて，むしろ「（未来や目的から切りはなされた）現在」への拘束に対する「抵抗の論理」としての可能性を示唆している。

第三報告「時間をめぐるプラグマティズムの系譜：ジェイムズ，パーク，ゴフマンを中心に」で小川（西秋）は，アメリカ社会学のなかで時間に対する独自のアプローチを提示した系譜として，プラグマティズムから『日常生活の自己呈示』のアーヴィング・ゴフマンへと連なる流れを指摘し，とりわけウィリアム・ジェイムズによる「迂回路」，「跳躍」，「仮面」という三つの側面をもつ「ループ」としての時間概念がその系譜のなかで与えた示唆について論じている。

第四報告「時計時間の知識社会学：バーバラ・アダムの複数的時間論を手がかりにして」で末田は，現代社会における「時計時間の専制」の問題に対するアプローチとして，バーバラ・アダムの「複数的時間論」を取り上げ，アダムが近代社会における「複数的時間の存在」を擁護していた一方で，「時計時間の特権的地位」をも認めてより綜合的な時間論に道を開いたことを論じつつ，むしろ近代社会のなかでは「時計時間という極」の存在が「それ以外の時間概念が存在しうる理論的空間」を担保している可能性を示唆し，そうしたアダムの構想の背後にある時間理論とフェミニズムのつながりを，アダム初期の研究に基づき跡づけている。

以上までが前半の部会である。各報告の論点はそれぞれ異なるが，社会学のなかで提起されてきた時間概念や時間理論に対して，従来の現在主義的な解釈や単一的な規定を批判的に検討し，それらとは別の可能性を提示するという点で，関心の一致も見出される。

続く後半の部会について，以下で紹介する。

【セッション後半：2023 年 10 月 8 日（日）15:00 ～ 18:00】

(5) 高橋顕也（立命館大学）「社会は加速できない：社会学的システム理論と社会的加速理論の両立可能性について」

(6) 吉田耕平（鎮西学院大学）「社会変動の加速，組織的近代性，秩序の観念：P. ワグナーと H. ローザの戦間期観を結ぶもの」

(7) 坂井晃介（神戸大学）・朴慧原（一橋大学）「圧縮された近代における「非同時的なものの同時性」：「個人主義なき個人化」に着目して」

(8) 伊藤賢一（群馬大学）「ローザ理論における疎外された消費論の可能性」

第五報告「社会は加速できない：社会学的システム理論と社会的加速理論の両立可能性について」で高橋は，ハルトムート・ローザ（Rosa 2005=2022）が提唱した社会的加速理論について，同理論が近現代社会における「加速循環」と呼ばれる事態を説明するにあ

たって依拠している，ニクラス・ルーマンの社会学的システム理論との両立可能性について，必ずしもローザ自身による十分な検討が加えられていないとして公理論化の手続きを介して検証し，システム理論との整合性を考えるうえでは社会的加速を記述や観察の産物としてより限定的なものととらえる必要性を指摘した。

第六報告「社会変動の加速，組織的近代性，秩序の観念：P. ワグナーと H. ローザの戦間期観を結ぶもの」で吉田は，ローザによる近代化の過程における「社会の加速」と，その過程と並行して生じていたとされる「加速の抑止」のテーゼについて，ローザが参照したピーター・ワグナーの「組織的近代性」の議論と併せて，そうした事態が生じたとする19 世紀後半から 20 世紀半ばにかけての時期，特に広い意味での戦間期観をどのように捉えていたのかを，オーギュスト・コント以来の社会学史上の「秩序と進歩」の観念史を踏まえて検討し，ローザ自身がこれまで論究してこなかった問題として，「社会の加速」や「加速の抑止」の発生が想定されている戦間期には，むしろ「秩序」の観念の意義があらためて問われるようになっており，「社会の加速」テーゼの成立に関しても，社会学における「秩序」の観念の変遷を踏まえて，両者の連関に基づいて論じる必要性を指摘した。

第七報告「圧縮された近代における「非同時的なものの同時性」:「個人主義なき個人化」に着目して」で坂井と朴は，チャン・キョンスプ（張慶燮）によって提起された「圧縮された近代（compressed modernity)」の理論（Chang 2022）を，近代社会の特性を示す「非同時的なものの同時性」の概念を介して，東アジアにおける「個人主義なき個人化」と家族主義の問題に即して検討し，非西洋社会における近代的時間のバリエーションを包含するモデルとして捉える可能性を提起した。

第八報告「ローザ理論における疎外された消費論の可能性」で伊藤は，ローザが自らの社会的加速の理論と対をなすかたちで提起している，共鳴理論（Rosa 2018）における「共鳴」の理念を，「人と人」との関係を示す「水平の共鳴軸」，「人とモノ」との関係を示す「対角の共鳴軸」，そして自然や芸術あるいは信仰の対象のように自らを「超越するもの」との関係を示す「垂直の共鳴軸」という，三つの共鳴軸の構想をもとに，その構想が消費社会論に対してもちうる意義を検討し，とりわけ対角の共鳴軸の議論から，人とモノとの関係を物象化的関係と共鳴的関係で対比させて捉える枠組みとして，消費の真正性をめぐる議論に対して一つの可能性を提示したものとして読み解いている。

以上のように，後半の部会では，特にハルトムート・ローザの社会的加速理論と共鳴理論，そしてチャン・キョンスプの「圧縮された近代」の理論が取り上げられ，それらの理論がもつ現代社会の諸問題を論じるうえでの応用の可能性と，既存の社会学的な時間概念や時間理論に対するオルタナティヴな可能性の提示をおこなっている。

結：おわりに

本稿の「はじめに」で述べたように，「時間の社会学」研究の蓄積がすでに豊富に重ねられている一方で，依然として全体を包括したり，個々の研究をつなぐような視点が不在であるとするならば，「時間の社会学」に共通する視点や知見を明らかにするためには，個々の研究を超えた相互の対話を重ねていくに如くはない。本稿の元になったテーマセッションは，その対話のための一つの試みであった。バーバラ・アダム（Adam 1990: 1=1997: 1）が友人の発言を借りて言うように，もし「時間」がありふれた「生活の事実（a fact of life)」であるとするならば，社会とそこに生きる人びとの営みを研究する社会学にとって，そうした対話を続けていくことの意義は決して小さくない。

● 注

1. 以下で提示する「時間の社会学」の見取り図については，あくまで筆者が上記テーマセッションの企画趣旨を示すために設定したものであり，同テーマセッションの報告者一同や本特集の執筆者一同のあいだで必ずしも見解が一致しているわけではない点，あらかじめ留意されたい。
2. 一例として，「時間の社会学」という分野を成立せしめた一人と考えられるエビエタ・ゼルバベルは，1976 年の論考の冒頭でこのように記している。「時間は，哲学，物理学，心理学，人類学，経済学といった分野で大いに注目を集めてきたのに対して，社会学では相対的に軽視されてきた。社会学が時間を扱う場合，時間はせいぜい社会変動や余暇のような他の社会現象の一側面として扱われるにとどまり，独自の主題として扱われることがこれまでほとんどなかった。このような軽視は，時間があらゆる社会的行為に内在する構成要素であり，時間が社会生活のなかで果たしている重大な役割を無視することはできないということからすると，とりわけ驚くべきことである。静態的モデルよりも動態的モデルを支持することを明言する学問分野は，動態的モデルが前提とする主な次元，つまり時間に焦点を当てなければならない」（Zerubavel 1976: 87; cf. Bergman 1983: 462=1992: 82）。また鳥越（2015: 86-87）は，1970 年代以降の時期に関連する諸研究のあいだで生じた変化を，「「近代的時間」以外の別の時間性の探究」から「「近代的時間」そのもの」の「対象化」への変化として論じている。
3. 例えば, Nassehi（[1993] 2008）, Adam（1998）, Abbott（2001）, Rosa（2005=2022）, 伊藤（2008）, 多田（2013）, Urry（2016=2019）などの諸研究を参照のこと。
4. 以上は英語で書かれた著作に基づいた記述である。したがって，この時期に当該分野が――他言語の著者による貢献を含めて――英語圏を中心に発展したという可能性は十分ありうるものの，他言語の展開を追えていないため，その点は別稿を期したい。
5. 例えば，Bergman（1983=1992），Pronovost（1989=1996），Šubrt（2001, 2021），Tabboni（2006），辻（2011），鳥越（2015, 2019, 2022），Hirsh（2016）などの諸研究を参照のこと。
6. 筆者はこの問題系を，社会学の「文化論的転回（cultural turn（s））」における，社会的なものに対する「文化の相対的な自律性」に関する議論（cf. 大野 2001 ほか）を参照して構想している。
7. ここには前後で言及している諸文献を含めて，数多くの研究を関連づけることができるが，例えば Moore（1963=1974），Thompson（1967），Luhmann（1968=2013），Zerubavel（1981=1984），真木（1981=2012），Young（1988），Rosa（2005=2022）などにおける，〈時間的なもの〉と〈社会的なもの〉の関わりをめぐる議論を参照のこと。
8. もちろん，これらの古典的著者がまったく無視されていた，ということはない。例えばソローキンとマートンの論考（Sorokin and Merton 1937）における，デュルケームとモースやユベール，アルヴァックスらのみならず，ジンメルやアンリ・ベルクソン，ウィリアム・ジェームズ，あるいはアルフレッド・マーシャルやエーリッヒ・フェーゲリンなども含めて，人文社会諸科学の幅広い分野の文献への言及を見られたい。
9. そうしたなかで，アンリ・ベルクソン，エトムント・フッサール，ウィリアム・ジェイムズ，マルティン・ハイデガーといった哲学者らの時間論が社会学理論に対してもちうる意義が，あらためて再考されている。
10. 後にヘルガ・ノヴォトニー（Nowotony 1992: 424）は同様の考えを「時間多元論（pluritemporalism）」と呼んでいる。
11. ローザ（Rosa 2005: 447-451=2022: 369-371）の説く，後期近代における「脱時間化（Entzeitlichung）」に類する事態を指す概念として，とりわけ情報通信技術や，あるいはネットワーク理論や複雑系理論の発展をもとに提起された，マニュエル・カステル（Castells［1996］2010: 406）による「無時間的時間（timeless time）」やアーリ（Urry 2000: 123-130=2014: 218-230）による「瞬間的時間（instantaneous time）」の概念，あるいはそのアーリやスコット・ラッシュ（Lash 2002: 176-202=2006: 313-358）による「非線形的（non-linear）」な時間の構想があり（cf. Rosa 2005: 170=2022: 129；Urry 2016: 78-94=2019: 59-71；伊藤 2021: 2-4），小川（西秋）（2007: 771-774, 2010: 37-43）もまた，現代社会理論における「非線形性（ノンリニアリティ）」や「非線形的（ノンリニア）」あるいは「持続可能（サスティナブル）」な時間概念の意義について論じている。
12. 企画時点でのテーマセッション要旨は，日本社会学会ホームページに掲載されている（最終閲覧 2023 年 11 月 29 日，https://jss-sociology.org/news/20230330post-14331/）。
13. 以下の記述は，各報告者から事前に提出された報告要旨と当日に配布された報告資料に基づく。より詳細な内容やそれ以降の議論の展開については，本特集に収録されている小川（西秋），高橋，徳宮の各論考や，各報告者による関連する研究を読まれたい。

● 付記

本稿は，第 96 回日本社会学大会（立正大学品川キャンパス，2023 年 10 月 8 日）テーマセッション 6「「時間の社会学」と社会学的時間批判」のテーマセッション企画趣旨として筆者が報告した内容をもとに，大幅に加筆・修正して執筆した。また本稿は，日本学術振興会科研費基盤研究（C）「社会学的時間批判―公理論化と学説・応用研究の総合による現代的時間現象の批判的研究」（JP22K01917，研究代表者：高橋顕也，2022 ～ 2024 年度）の助成を受けた研究成果の一部である。

●引用文献

Abbott, Andrew, 2001, *Time Matters: On Theory and Method*, Chicago: University of Chicago Press.

Adam, Barbara, 1990, *Time and Social Theory*, Oxford: Polity.（伊藤誓・磯山甚一訳，1997，『時間と社会理論』法政大学出版局.）

Adam, Barbara, 1995, *Timewatch: The Social Analysis of Time*, Cambridge: Polity.

Adam, Barbara, 1998, *Timescapes of Modernity: The Environment and Invisible Hazards*, London and New York: Routledge.

Baert, Patrick, 1992, *Time, Self, and Social Being: Temporality within a Sociological Context*, Brookfield, Vermont: Avebury.

Bachelard, Gaston,［1936］1950, *La dialectique de la durée*, Nouv. éd., Paris: Presses universitaires de France.（掛下栄一郎訳，1976，『持続の弁証法』国文社.）

Bergman, Werner, 1983, »Das Problem der Zeit in der Soziologie: Ein Literaturüberblick zum Stand der „zeitsoziologischen Theorie“ und Forschung«, *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 35(3): 462-504.（Belinda Cooper（transl.），1992, “The Problem of Time in Sociology: An Overview of the Literature on the State of Theory and Research on the ‘Sociology of Time’, 1900-82,” *Time and Society*, 1(1): 81-134.）

Castells, Manuel,［1996］2010, *The Rise of the Network Society*, 2nd ed. with a new preface, Chichester, West Sussex and Malden, Massachusetts: Wiley-Blackwell.

Chang, Kyung-Sup, 2022, *The Logic of Compressed Modernity*, Cambridge: Polity.

Elchardus, Mark, 1988, “The Rediscovery of Chronos: The New Role of Time in Sociological Theory,” *International Sociology*, 3(1): 1-108.

Geißer, Karlheinz A., Klaus Kümmerer, und Ida Sabelis（Hrsg.），2006, *Zeitvielfalt: Wider das Diktat der Uhr*, Stuttgart: S. Hirzel

Giddens, Anthony,［1984］1987, “Time and Social Organization,” *Social Theory and Modern Sociology*, Stanford, California: Stanford University Press, 140-165.（小川葉子訳，1998，「時間と社会的組織化」藤野弘夫監訳『社会理論と現代社会学』青木書店，193-226.）

Giddens, Anthony, 1990, *The Consequences of Modernity*, Cambridge: Polity.（松尾精文・小幡正敏訳，1993，『近代とはいかなる時代か？：モダニティの帰結』而立書房.）

Gurvitch, Georges, 1958, *La multiplicité de temps sociaux*, Paris: Centre de Documentation Universitaire.（Myrtle Korenbaum（ed. and transl.），1964, *The Spectrum of Social Time*, Dordrecht: D. Reidel.）

Hall, Edward T., 1959, *The Slient Language, Garden City*, New York: Doubleday.（=1966，國弘正雄・長井善見・斎藤美津子訳『沈黙のことば：文化・行動・思考』南雲堂.）

Hall, Edward T., 1983, *The Dance of Life: The Other Dimension of Time*, Garden City, New York: Anchor Press/Doubleday.（宇波彰訳，1983，『文化としての時間』TBS ブリタニカ.）

浜日出夫，2010，「記憶と場所：近代的時間・空間の変容」『社会学評論』60(4): 465-480.

濱西栄司，2016，「複数の時間とアンビバレンス：タッボーニ／トゥレーヌによる行為論的時間論」（特集・社会学理論の最前線：時間）『社会学史研究』38: 7-24.

Harvey, David, 1990, *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Cultural Change*, Cambridge, Massachusetts and Oxford: Blackwell.（吉原直樹監訳，［1999］2022，『ポストモダニティの条件』筑摩書房.）

Hassard, John（ed.），1990, *The Sociology of Time*, Basingstoke, Hampshire; London: Macmillan.

Hirsch, Thomas, 2016, *Le temps des sociétés: d'Émile Durkheim à Marc Bloch*, Paris: Éditions de l'École des hautes études en sciences sociales.

Irvine, Richard D. G., 2020, *An Anthropology of Deep Time: Geographical Temporality and Social Life*, Cambridge: Cambridge University Press.

伊藤美登里，2008，『現代人と時間：もう〈みんな一緒〉ではいられない』（早稲田社会学ブックレット）学文社.

伊藤美登里，2021，「情報社会における時間意識の変容に関する予備的考察」『人間関係学研究――社会学／社会・臨床心理学／人間福祉学』大妻女子大学人間関係学部紀要，22: 1-17，（2023 年 11 月 30 日最終閲覧，https://otsuma.repo.nii.ac.jp/record/6967/files/N22001.pdf）

Lash, Scott, 2002, *Critique of Information*, London: Sage.（相田敏彦訳，2006，『情報批判論：情報社会における批判理論は可能か』NTT 出版.）

Luhmann, Niklas, 1968, »Die Knappheit der Zeit und die Vordringlichkeit des Befristeten«, *Die Verwaltung*, 1: 3-30.（Erneut veröffentlicht in: Christian Geyer（Hg.），2013, *Niklas Luhmann. Die Knappheit der Zeit und die Vordringlichkeit des Befristeten*, Berlin: Kadmos, 11-60.）

Luhmann, Niklas, 1976, “The Future Cannot Begin. Temporal Structures in Modern Society,” *Social Research*, 43(1): 130-152.（Niklas Luhmann, 1990, »Die Zukunft kann nicht beginnen: Temporalstrukturen der modernen Gesellschaft«, Peter Sloterdijk（Hg.），*Vor der Jahrtausendwende: Berichte zur Lage der Zukunft*, 1. Band, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 119-150.）

真木悠介，1981，『時間の比較社会学』岩波書店.（再録：真木悠介，2012，『定本　真木悠介著作集Ⅱ　時間の比較社会学』岩波書店.）

Martins, Herminio, 1974, “Time and Theory in Sociology,” John Rex（ed.），*Approaches to Sociology: An Introduction to Major Trends in British Sociology*, London and Boston: Routledge & Kegan Paul, 246-294.

Moore, Wilbert E., 1963, *Man, Time and Society*, New York and London: John Wiley.（丹下隆一・長田攻一訳，

1974,『時間の社会学』新泉社.）
見田宗介，1978,「狂気としての近代：時間の比較社会学」『世界』388: 323-330.（再録：真木悠介，2013,「狂気としての近代：時間の比較社会学・序」『定本　真木悠介著作集Ⅳ　南端まで：旅のノートから』岩波書店，143-162.）
Nassehi, Armin［1993］2008, *Die Zeit der Gesellschaft: Auf dem Weg zu einer soziologischen Theorie*, 2. Aufl., Neuaufl. mit einem Beitrag »Gegenwarten«, Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.
Nowotny, Helga, 1992, "Time and Social Theory: Towards a Social Theory of Time" *Time and Society*, 1(3): 421-454.
野家啓一，［1996］2005,『物語の哲学』岩波書店.
小川（西秋）葉子，2007,「グローバライゼーションをめぐる二重らせんの時間：ハイパー・リフレクシヴィティと集合的生命の解明にむけての批判的考察」『社会学評論』57(4): 763-783,（最終閲覧 2023 年 11 月 30 日，https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsr1950/57/4/57_4_763/_pdf/-char/ja）
小川（西秋）葉子，2010,「第 1 章　時間―空間と生命環境　サステナビリティとノンリニアリティ：グローバルな秩序形成における集合的生命の時間」小川（西秋）葉子・川崎賢一・佐野麻由子編『〈グローバル化〉の社会学：循環するメディアと生命』恒星社厚生閣，25-51.
小川（西秋）葉子，2022,「時間地理学と音楽コレオグラフィによるモビリティーズ映画探究：「アベンジャーズ／エンドゲーム」（2019）分析におけるエンタングルメント概念の効用」『メディア・コミュニケーション』慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所，72: 147-168,（最終閲覧 2023 年 11 月 27 日，https://www.mediacom.keio.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2022/04/15_mc72_Yoko-Ogawa-Nishiaki.pdf.）
大野道邦，2001,「文化社会学をめぐる問題」『人間文化研究科年報』奈良女子大学大学院人間文化研究科，13: 65-75.
Pronovost, Gilles, 1989, "The Sociology of Time," *Current Sociology: Monographs*, 37(3): 1-98.（Gilles Pronovost, 1996, *Sociologie du temps*, Paris et Bruxelles: De Boeck & Larcier.）
Rosa, Hartmut, 2005, *Beschleunigung: Die Veränderung der Zeitstrukturen in der Moderne*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.（出口剛司監訳，2022,『加速する社会：近代における時間構造の変容』福村出版.）
Rosa, Hartmut, 2018, *Resonanz: Eine Soziologie der Weltbeziehung*, Berlin: Suhrkamp.
「社会の時間」研究会，2020,「特集紹介：「時間の社会学」の現代的展開」『社会学雑誌』神戸大学社会学研究会，37: 75-80,（最終閲覧 2023 年 11 月 28 日，https://doi.org/10.24546/E0042279）
Sorokin, Pitirim A. and Robert K. Merton, 1937, "Social Time," *American Journal of Sociology*, 42(5): 615-629.
Šubrt, Jiří, 2001, "The Problem of Time from the Perspective of the Social Sciences," *Czech Sociological Review*, 9(2): 211-224,（最終閲覧 2023 年 11 月 27 日，https://www.jstor.org/stable/41133184）
Šubrt, Jiří, 2021, *The Sociology of Time: A Critical Overview*, Cham, Switzerland: Palgrave Macmillan.
Tabboni, Simonetta, 2006, *Les temps sociaux*, Paris: Armand Colin.
多田光宏，2013『社会的世界の時間構成：社会学的現象学としての社会システム理論』ハーベスト社.
Thompson, Edward P., 1967, "Time, Work-Discipline, and Industrial Capitalism," *Past and Present*, 38: 56-97.
鳥越信吾，2015,「時間の社会学の展開：「近代的時間」観をめぐって」『人間と社会の探究』（慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要　社会学・心理学・教育学）79: 83-97,（最終閲覧 2023 年 11 月 27 日，https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000079-0083）
鳥越信吾，2016,「もう一つの時間の比較社会学：真木悠介『時間の比較社会学』からの展開」奥村隆編『作田啓一 vs. 見田宗介』弘文堂，145-77.
鳥越信吾，2019,「近代的時間と社会学的認識」『日仏社会学年報』30: 17-33,（最終閲覧 2023 年 11 月 27 日，https://doi.org/10.20811/nichifutsusocio.30.0_17）
鳥越信吾，2022,「「時間の社会学」のあゆみ」高橋顕也・梅村麦生・金瑛編『社会の時間：新たな「時間の社会学」の構築へ向けて』科研費（JP19K02145，JP22K01917）研究成果報告書,（最終閲覧 2023 年 11 月 28 日，https://hdl.handle.net/20.500.14094/90009404）
辻正二，2011,「時間社会学の可能性と課題」（特集 現代社会への時間社会学的接近）『西日本社会学会年報』9: 3-20.
内山節，1993,『時間についての十二章：哲学における時間の問題』岩波書店.
梅村麦生，2020,「非同時的なものの同時性：社会学における非同時性の問題について」『社会学史研究』42: 91-109,（最終閲覧 2023 年 11 月 27 日，https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008806）
Urry, John, 2000, *Sociology beyond Societies: Mobilities for the Twenty-first Century*, London and New York: Routledge.（吉原直樹監訳，2006,『社会を越える社会学：移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版局.）
Urry, John, 2016, *What is the Future?*, Cambridge: Polity.（吉原直樹・高橋雅也・大塚彩美訳，2019,『〈未来像〉の未来：未来の予測と想像の社会学』作品社.）
Young, Michael, 1988, *The Metronomic Society: Natural Rhythms and Human Timetables*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
Zerubavel, Eviatar, 1976, "Timetables and Scheduling: On the Social Organization of Time," *Sociological Inquiry*, 46(2): 87-94.
Zerubavel, Eviatar, 1981, *Hidden Rhythms: Schedules and Calendars in Social Life*, Chicago, Illinois: University of Chicago Press.（木田橋美和子訳，1984,『かくれたリズム：時間の社会学』サイマル出版会.）

梅村麦生（神戸大学大学院人文学研究科講師）